

雑感(その1)

ここだけの話、私は日本政治のレベルの低さに絶望している。絶望の理由は、あまりにも貧困な霞が関周辺での痴話喧嘩にある。

その一例が安保戦略改定をめぐる議論だ。「なぜ今、安保戦略改定なのか」という問いに対して総理大臣は、中国による強引な領空・領海への侵犯、北朝鮮の常軌を逸した弾道ミサイルの発射などを挙げている。そうした脅威に対抗するために「敵基地攻撃能力」という防衛策が必要だとの説明を繰り返す。敵が攻撃を仕掛けてくる前にこちらが敵を叩くという作戦らしい。しかし肝心かなめの問題でつまずいている。金だ。敵基地攻撃のための配備を進めるために必要な巨額の金をどこから持ってくるのかという大事な問題で、ニッチもサッチモ行かなくなっているのだ。

実に情けない。こんな事、私に任せてくれれば簡単に解決してみせる。この難題を簡単に、しかもタダで乗り切るための秘策を私は持っているのだ。あまり公開したくは無いけれどご愛読くださる諸兄姉のためなら躊躇は無い。喜んで公開する。

その秘策とはこうだ。日本をアメリカの51番目の州にする、ただそれだけのことだ。説明するまでもなくアメリカにはカリフォルニア州やテネシー州、ハワイ州など現在50の州がある。この51番目として日本がアメリカの州になるということだ。

この流れがうまくいけばアメリカ大統領を「日本州」から出すことだって不可能ではない。仕組みは超簡単だ。「日本州」から大統領候補を出せば良いのだ。思い出してもらいたい。2年前・2020年のアメリカ大統領選挙で民主党・バイデンさんは約8,000万票を、

共和党・トランプさんは約7,380万票を獲得した。他方「日本州」から候補者を立てた場合、5,567万獲得は固い、と私はみている。



アメリカ 51 星条旗

その根拠はこれだ。2021年10月の衆院議員選挙における総得票数だ。その数は自民、立民、維新、公明、共産、れいわ、社民の7党を合計したもので5,567万票だったことだ。どうだろうか？ 5,567万ではバイデンさんを追い越すには至らない。あと2,000万票程足りないことになるがそこは選挙の話。キャンペーンの展開次第でなんとでもなる数字だと私は考えている。

次に「日本州から大統領を出す」と「敵基地攻撃能力をタダで手にいれる」との関係を説明する。その前に下の表をご覧ください。

	日本	アメリカ
人口	1 億 2613 万人	3 億 2926 万人
兵員(推定)	30 万 3157 人	214 万 1900 人
戦闘機	297 機	236 機
戦車	1004 台	6287 台
主要艦艇・空母	主要艦艇 131 隻 空母 4 隻	主要艦艇 415 隻 空母 24 隻
軍事予算	470 億ドル	7160 億ドル

この表をご覧になってどうお感じになるだろうか。結論は日本がアメリカの51番目の州になり、さらに「日本州」から大統領を出せば「旧日本国」はその瞬間に15倍もの軍事予算と、桁違いの軍事力を手にすることができる、という理屈にある。

まとめに入る。安保戦略改定でいうところの敵国は「日本はクズのような小国だから、はなから相手にしていない。相手にするのはアメリカのみだ」と罵倒している。平気で日本の頭の上に弾道ミサイルを飛ばして喜んでいるはその証明なのだろう。しかし「日本州」が実現すればその瞬間に敵国は「日本州」に指一本触れることが出来なくなるだろう。なぜなら一発でも弾道ミサイルを飛ばしたならば、敵国はその数分後に地球上から消えてしまうからだ。反省して寝る。

雑感(その2)

ここだけの話、我が国は間違いなく「衰退途上国」の道たどっている。それは政治、経済、ビジネス、金融、スポーツ、社会、文化、科学などすべての分野でみられることで目を覆うばかりだ。『ジャパン・アズ・**ナンバーワン**』と煽てられ、いい気になっている間に『ジャパン・アズ・**ワーストワン**』になってしまったのだ。

「荒む心でいるのじゃないが 泣けて涙も 涸れ果てた こんな女に誰がした」という菊池章子さんの名曲がある。この歌詞をもじっていえば「こんな日本に誰がした」という歌になる。答えは日本教育哲学の貧困にあると私は叫びたい。

日本教育哲学の貧困というドロ沼から湧き上がる有毒ガスのようなものの最悪例が「4月始まり」である。「4月始まり」を世界の主流である「9月始まり」に急いで改めることが無い限り日本のガラパゴス化は悪化する。ガラパゴス化とは「日本の中だけで独特に発達し

たもの、世界標準とはかけ離れたものが、世界との競争の中で淘汰されてゆく現象」とパソコンにある。



この問題の解決がどれほど大切、かつ緊急なのかということは今回のワールドカップでハッキリと示されていた。資料によれば日本がワールドカップに初出場した24年前の1998年フランス大会。そこでの日本代表は国内 J リーグでプレーする選手のみ。「海外組」という言葉すら無い時代だった。その結果健闘むなく日本代表は一勝もできないまま姿を消すことになる。

それがどうだろうか、今大会では代表26人中19人が「海外組」だということではないか。にわかファンである私だって堂安律(ドイツ)、田中碧(ドイツ)、三笥薫(イングランド)、伊東純也(フランス)、そして遠藤航(ドイツ)など「海外組」の活躍に狂喜した。ドイツにもスペインにも打ち勝つなんて夢のまた夢だったのに……。この勝利こそ「海外組」の存在無くして語ることはできないであろう。彼らの共通点は、早くから海外に移籍し、そこで世界の一流選手と日常的にガチンコ勝負する中で学び、身に着けたサッカーの哲学、精神がもたらした成果にある。

サッカーばかりではない。野球の大谷翔平だって同じだ。彼は今から10年前に「北海道日本ハム」に入団し、その5年後にアメリカのメジャーリーグ「ロサンゼルス・エンゼルス」

に移籍した。日ハムにいた頃から「二刀流」の選手として知られていたが、それが花開いたのは間違いなくアメリカに渡ってからだ。強調したいのは天才のように輝く大谷翔平でさえもアメリカに渡った後の苦しみ、もがきも、それを乗り越えるための努力には計り知れないものがある。それを成功させたものこそがメジャーリーグの基盤であるベースボールの哲学、精神なのだ。

結論に入る。海外に出て世界を知り、そこで自分自身を磨いて雄飛したいと望む若者は今後も間違いなく増えるであろう。しかしそれを阻む最大の障壁が日本の「4月始まり」にあることと、それを取り外すことがない限り、海外を目指す若者の多くが学年のダブリや遅れ、社会人であれば年度で仕切られる仕事の束縛、こうした壁に苦しむ羽目になるのである。この壁を取っ払うために日本が「9月始まり」に変更したところで、誰がどれほどの被害を受けるのであろうか。「責任者を出せ」と叫びたい。反省して寝る。

雑感(その3)

ここだけの話、2年ほど前から私は、ある女性とつきあっている。女性の名前はA子。私がA子と初めて出会ったのは山梨県の甲府で、その後しばらくの間、私は甲府通いを楽しんでた。しかし二人の関係が深まるにつれてA子は日野市に転居し、その数か月後には東村山に移ってきた。家内も当然、このことは知っているが特段、私を咎める様子もない。

私がA子に惚れたのは、その人なつっこい性格と、屈託のない笑顔に惹かれたからである。A子とは毎日でも会いたいし、叶うものなら一緒に暮らしたいと思っているが、いまだに言い出せないでいる。悶々としている。

話がかなり怪しくなってきたので、ここで告白する。A子とは私の孫娘のことでもうすぐ3歳になる。今度の夏を目途に現在、トイレトレーニングを続けている。

オムツなどというものは遅かれ早かれ必ず外す時が来るのだからのんびりやればいいではないか、と思うのだがA子の場合はそうも言っていられないらしい。この春に入る幼稚園には温水プールの水泳教室があるが、その教室に参加するためにはオムツを卒業していなければならない。オムツをしている園児は見学だというのだ。

話は変わるが私の唯一の趣味は水泳で、今でも週2～3回ほどプールに通っている。そのおかげでクロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライの4種目は一通り泳げる。「今さらそこまで練習してどうするの？」と時々聞かれるが、その時は「見事なバタフライで三途の川を渡り切り、これまた見事なターンで折り返してきて棺を取り囲む方々をビックリさせるのだ」と答えている。冗談はともかく水泳という自分の趣味とA子の水泳教室とがピッタリ一致したことで私は今、完全に舞い上がっている。



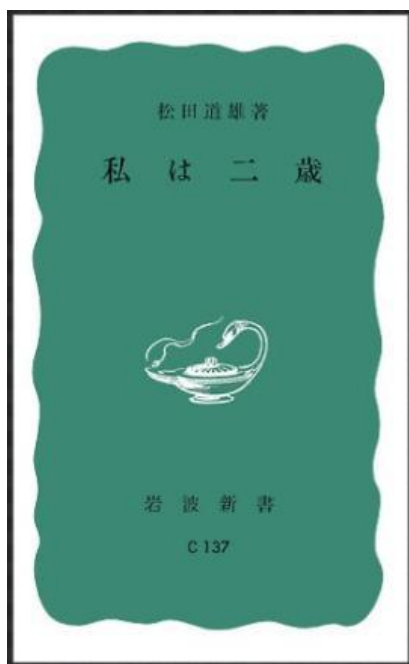
しかし心配もある。家内の予言だ。A子が水泳教室に通い始めたら私もオッケーでプール乗り込み、場所・雰囲気など御構い無しに「どうだ、うちのA子の泳ぎをみたか」と大声で叫び続ける「ハタ迷惑な老人」になるだろう、というのだ。

この予言で思い出したのが松田道雄さんの名著『私は二歳』だ。その一節を引用する。

「早期教育～期待する親に問題～」という章の一節で、二歳の男児の父親の独白だ。

『ぼくの三つの誕生日のとき、おやじが原色動物図鑑を買ってくれたんだ。ウツシ絵に魚類というのがあってね。タイだのヒラメだのをうつして遊んでいるうちに、ぼくは五十ばかりあった魚の絵を、おぼえてしまったんだな。それでおやじがよろこんでしまったんだ。生物学でもやるかと思ったんだな。千ページもある動物図鑑を誕生日にくれたんだ。その図鑑の魚類とホ乳類の部をぼくは二カ月たらずでおぼえてしまった。字はよめないんだけど絵をさすと名を言うのさ。おやじはとてもうれしかったらしいな。ばかな話さ。いまそれがどうだ。魚といったらタイとヒラメぐらいしか知らない。この話をおふくろにされると、僕はむしうに腹が立つんだ。オモチャにされたかと思うとね。』

この本が発刊されたのは昭和36年3月。私はまだ小学6年生だった。この本を熟読したはずは無い。周囲の大人の話が記憶に残っており、それが蘇ったということなのであろう。この雑文をしたためる途中で無性に読みたくなり、急いで読み直した。そして松田道夫先生の偉さを改めて学んだ。反省して寝る。



私は赤ちゃん (岩波新書)

